

(上-1)

に ちん とう 二 陳 湯

[81] 二陳湯 効能と証

出典：『和剤局方』

■効能又は効果

悪心、嘔吐

<証に関わる情報> 使用目標＝証

体力中等度前後の人で悪心、嘔吐、胃部不快感などを訴える場合に用いる。

- 1) めまい、動悸、頭痛などを伴う場合。
- 2) 心窩部に振水音を認めることが多い。

【POINT】 一般的に、どんな病気でも「痰飲＝痰と飲」（後述）の状態にあれば有用です。

【組成】 陳皮（一銭，去白），半夏（二銭，姜製），白茯苓（一銭），甘草（五分）。

[81] 二陳湯 組成			
半夏	5	甘草	1
茯苓	5	生姜	1
陳皮	4		

【解説】 朱丹溪（1281-1358）は、全身の「痰」に有用な「痰治」の重要な薬剤としています。また、『医方考』（明の呉崑の著書，全4巻，1584年初版）には、「湿痰は様々な疾患を生じるが，二陳湯はこの湿痰による病気に

効果がある」としています。

まず、混乱を避けるため、類似する用語の定義を解説します。「湿痰」は「痰」の原因で、「湿痰」は「湿」から発生します。つまり、「湿⇒湿痰⇒痰」となります。さて、最初の「湿」ですが、これは「水飲」が胃内に入り変化して出来ます。消化吸収能、すなわち、「脾」の機能が低下しているときは、水飲が満足に処理できず、「膈間」(mucosa and/or mesenteries)に発生した「湿」が停留します。そして、中焦・下焦の二焦にある「気」が、その「湿」を薰蒸(heat)していき粘稠度が増加します。この粘稠度が希薄なものを「飲」、濃厚なものを「痰」といいます。つまり、「飲」と先述した「狭義の『湿痰』」(「広義の湿痰」は後述)とは、ほぼ同義語ということになります。さて、上記の過程で「水飲」⇒「湿」⇒「湿痰」⇔「飲」⇒「痰」が生じるわけですが、これらを総括する用語として「広義の『湿痰』」があります。つまり、朱丹溪と呉崑(1551-1620?)は、「この広義の『湿痰』」のときに、二陳湯が有用である」と述べているのです。

次に、配合される生薬の意義を考えます。以下、本書では、解説の最初か後半に重要生薬の五味・四気を記載し、そこから本剤に配合される意義を推察していくという手順を取ります。

半夏は辛・熱なので、湿をよく燥かします。茯苓は甘・淡で、湿をよく浸らします。この2剤の作用で湿がなくなれば、先述の生成過程で理解できるように、痰が生じるわけではありません。つまり、病気を治療するには、より前段階、つまり、その根本的病因を解決するというのが作戦です。陳皮は辛・温で、「気」をよく働かします。甘草は甘・平で、消化吸収能である「脾」の働きを増強します。先述したように「脾」の機能が低下すると「水飲」から「湿」へ移行して滞留するわけです。これを比喻のようでありながら「理論」である「五行・五臓」の概念で考えてみましょう。五臓の「脾」を五行に相對させると「土」に当たります。「土」がしっかりしておれば、雨が降ったり、川が氾濫したりしても、

その湿を制御することができるというわけです。さらに、陳皮の働きで気が十分に利用できるときは、そのエネルギーで痰を移動させるため滞留することがありません。つまり、脾を丈夫にさせることは、根本を治療する「本治」⇒「湿を作らない」でもあり、気を働かすことは、症状を治療する「標治」⇒「湿を滞留させない」でもあるのです。

さて、次のような疑問を感じられるかもしれません。「痰があって、しかも、口渇がある患者がいるが、半夏は『燥』の作用が強すぎるので半夏を除去して、貝母・栝楼根・栝楼実などの『潤』の作用剤に変更すべきではないか」と。この回答として次の口訣を引用します。「口渇して何度も水を飲むときは半夏を他剤に変更するほうがよいが、口渇があるのに水を飲もうとしないときは、そのまま半夏が適応である」と。【千福の註：前者の場合は五苓散、後者の場合は二陳湯か小半夏加茯苓湯が適応です】後半の症状は口渇の原因が、湿を「本」(根本)とし、熱による「標」(症状)で生じていることを表現しています。実は、この口渇は本当の病態、つまり脱水が原因ではなく、湿が極まって熱が発生している症状である、ということです。明快な頭脳を持つ医師は、これを見破るのです。

【予の口訣 (11)】

① 気鬱・胸膈不快では香附子・撫芎・蒼朮などを加えます。二陳湯の「気」に対する効果を増強するためです。

② 四季を通じて、感冒・頭痛・発熱、悪寒・咳嗽・嘔吐(くしゃみ)の患者には、羌活・防風・川芎・白芷・升麻・葛根などの生薬を加えます。

③ 食あたりのようなときは、山楂(子)・麦芽・神麴・枳実・青皮の類を加えます。

④ 咽喉痛では、桔梗・荊芥・薄荷の類を加えます。

⑤ 酒飲みの患者には木通・乾葛の類を加えます。【千福の註：上-7 葛花解醒湯の項目を参照】

⑥急性胃腸炎などで嘔吐・下痢のあるときは、その証に従って加減します。

⑦朱丹溪によれば、湿気で、頭痛・倦怠感があるときは二陳湯に酒芩・羌活・蒼朮・木通を加えて、「風を散らし、湿を行らす」という方法をとります。これは絶妙です。

⑧二陳湯に昇提の薬を加えて、大便をよく潤して、頻尿を改善させます。食事の不摂生によって生じる「内傷」の病気では、中焦の気(=中気)が運らないために、上竅(耳・眼・鼻・口の穴)が閉じて、下竅(尿道口、肛門)も通らなくなります。そこで、朱丹溪は、二陳湯に蒼朮・白朮・升麻・柴胡を加えて昇提作用を発揮させ、中気を運らせます。すると、大便が潤って、排尿状態が改善するのです。これは「最妙」の方法です。

⑨朱丹溪によれば、半身不遂は「痰」が右側に存在する頻度が多く、これは「気虚」を示していることとなります。そこで、次に説明する「四君子湯」を二陳湯に加えると良好で、さらに、竹瀝・姜汁を加えます。また、肥満のある方に「湿」は多く、この場合は、少量の附子・烏頭を加えて、経を行らします。

⑩一般的に、痰は火と合わさると、両者の作用で上気を昇らします。これによって、赤面・喘促(=喘息)・嘔吐・眩暈・嘈雜(胸やけ)・呑酸が生じます。この際は本方に、酒炒の黄連・炒黒の山梔子・酒炒の黄芩・生姜を加えて治療します。臨床における、この有効率は高いです。さらに、嘈雜が重症のときは呉茱萸を加えます。ちなみに、黄芩・黄連を酒炒しないで、また、生姜を加えないときは無効となります。レシピには忠実に従うのが良い方法です。

⑪頭痛が頻発するものを「頭風」といいます。これが、左右のどちらかに偏って痛む場合は「偏頭風(=migraine?)」と命名されます。この症状に対しては、本方に黄芩(酒炒)・川芎・細辛・黄連(酒炒)・薄荷・蒼耳・胆南星を追加します。

以上、11の口訣を示しましたが、「二陳湯、之これをつかさどる」と記載がある書籍・文献などは多すぎて、すべてを列挙することは不可能です。ここでは、その一部を示しただけであることをご容赦ください。

【加減の方法】

加減の方法はエキス剤ではなかなか作成できません。しかし、参考になることも少なくありませんので下に表を作成して記載します。

付帯状況	加（減）する生薬，または，合方
痰が頭にあり痛む	川芎・藁本・升麻・柴胡・蔓荊・細辛・薄荷など
痰が腰膝下にあり腫痛する	黄柏・防已・木通・蕪荈・木瓜・牛膝
痰が胸腹中にあり痛む， 或いは，痞満	白朮・枳殻・桔梗・砂仁・神麴・麦芽
痰が胸下にあり痛む，或いは， 湿性ラ音がある	柴胡・青皮・川芎・山梔子 <small>せんきゅう</small> ・白芥子 <small>さんしし</small> など
痰が経絡中にある，或いは， 胸背・手足・臂膊が痛む	上焦 <small>じょうじょう</small> ：防風・羌活・威靈仙
	下焦 <small>げじょう</small> ：防已・牛膝・木通
	冬の時期：烏頭 or 附子
痰が中焦 <small>ちゅうじょう</small> にあり，嘔気・呑酸・ 嘈雜，或いは，水分を嘔吐， 或いは，心窩部に圧痛	白朮・蒼朮・神麴・麦芽・川芎・砂仁・草豆蔻・枳実・猪苓・沢瀉・黄連・呉茱萸・梔子仁・木香・檳榔など
痰が頸頂・胸脇の間にあつて， 結核を為す	貝母・枳殻・桔梗・連翹・玄参・竜胆草
風痰が壅塞する	青州白丸子を送下す
悪寒・喘咳・痰気が上逆	麻黄湯を合す
暑 <small>やぶ</small> に傷れ痰を生じる	白虎湯を合す

湿に傷れ痰を生じる	平胃散を合す
飲に傷れ痰を生じる	五苓散を合す
食に傷れ痰を生じる	保和丸を送下す
気によって痰を生じる	四七湯（＝半夏厚朴湯）を合す
痰火が盛ん	河間の涼膈散を合す
気虚で痰がある	四君子湯を合す⇒六君子湯になる
血虚で痰がある	四物湯を合し、黄柏・知母を加える
気盛壅	滾痰丸を送下す

口訣と同様に、加減の例を全部列挙することは不可能です。表はその一部です。

(上-2)

し くん し とう 四君子湯

〔75〕四君子湯 効能と証

出典：『和剤局方』

■効能又は効果

やせて顔色が悪くて、食欲がなく、つかれやすいものの次の諸症：
胃腸虚弱，慢性胃炎，胃のもたれ，嘔吐，下痢

＜証に関わる情報＞ 使用目標＝証

体力の低下した人が，胃腸機能が低下して，食欲不振，心窩部の膨満感などを訴える場合に用いる。

- 1) 全身倦怠感，手足の冷えなどを伴う場合。
- 2) 腹壁の緊張が弱く，心窩部に振水音を認める場合。

【POINT】 一般的に，どんな病気でも「気虚」の状態にあれば有用です。

【組成】 人参^{にんじん}・白朮^{びやくじやく}（炒）・白茯苓^{びやくぶくりよう}・炙甘草^{しゃかんそう}（各二錢）。

〔75〕四君子湯 組成

蒼朮	4	甘草	1
人参	4	生姜	1
茯苓	4	大棗	1

日本人の多くは甘い物を嫌うと感じられ，日常の臨床では甘草を減量することも可能です。

【解説】『医方考』によれば、「本剤は、①顔色が蒼白で、②声に力がなく・言葉数も少なく、③筋力低下があり、④脈が虚弱の患者に有用」とあります。この顔色蒼白という視診所見だけでも「気虚」と診断可能ですが、声に力がなく、言葉数も少ないということを知っても「気虚」とわかり、四肢の筋力低下を問診で把握しても「気虚」とわかります。さらに、脈診で虚弱と判断されるときは、この切診の所見で「気虚」と診断可能です。その「気虚」のとき、治療は「気」を補うのがよいわけですが、その際、この四君子湯が有用なのです。

人参は甘・温で、その性質は潤です、五臓の元気をよく補います。白朮は甘・温で脾を健にし、五臓の母気をよく補います。茯苓は甘・温～平で、五臓に清気をもたらします。甘草は甘・温～平で、五臓の気が不協和音となっている状態をうまく調えます。ここで注目すべき点は、この4葉がすべて、甘・温であるということです【千福の註：茯苓と甘草は「温薬」というよりも、むしろ「平薬」と記載されていることが多いが、……】。「甘」は中焦に有益な味覚で、「温」は中焦に気を与えることができます。しかも、これら4剤は公正中立な不偏不倚の君子のごとくでもあります。その理由で四君子（湯）と命名されているわけです。

【予の口訣（6）】

①朱丹溪は、右手の脈が不足して右半身不遂（right hemiplegia）の患者は、本剤が有用としています。【千福の註：左半身不遂のときは次の四物湯が有用です。四物湯の口訣①参照】

②『医方考』には、高齢者の気弱な患者が痔出血の止血困難なときに有用、と記載があります。これを誤って、痔を攻撃するタイプの薬を投与し、出血大量となり止血せず、血圧低下がするようなときにも、また、本剤が有用である、としています。これを「陰陽説」の理論で考察します。「血」は有形の「陰」に属します。バランスの問題なのですが、血を固める作用、つまり、血液凝固（coagulation）には陰と逆の立場である

「陽」，すなわち，無形の「氣」が必要となります。したがって，高齢となつて，氣が弱まる時は「血」，この場合は，血液凝固能が下がることとなります。また，長期に投薬治療を受けて氣が損傷を受けるときも同様のことが生じます。いずれの治療も本剤が有用です。蛇足の解説かもしませんが，人参・白朮・茯苓・甘草の4剤はすべて，甘・温で「益氣」の生薬です。これらで，大いに氣が充盈じゅうえいされるときは，自然と有形の血が凝固するようになります。それは，あたかも大地から水が溢れそうになるときに，四方の土手を高くして，十分に充満させるような状況です。こうしておけば危険は回避されるのです。

③私は，すべての下血・下痢・帯下など氣が下へ落ち込んでいく，下陷かんと呼ばれる症状に本剤を用います。これで不十分な場合は，升麻・柴胡・蒼朮を加えるか，当歸・芍薬を加えています。

④突然死である「暴死」ぼうし，肺水腫や肺炎で泡沫音がする「痰聲」たんせいのある患者を「痰厥」たんけつといい，本方で治療します。不十分なときは竹瀝・姜汁を加えています。

⑤手足が萎えて冷える状態，すなわち，「痿厥」いけつに有用です。『医方考』には，陽明ようめい（手の陽明大腸経・足の陽明胃経）が虚して，歩行補助具などの機器を利用するような四肢の筋力低下があるときに，本剤が有用とあります。経絡の陽明経は足の場合は「胃」で，五臓五行論では「胃」は「土」に相当します。「土」は万物の母となります。四書五経の『易経』によれば，「至る哉，坤元（=大地）から万物が資りて生ず」（大地とはなんと素晴らしいものであろうか。万物はここから生まれる）とあります。つまり，いったん「胃・土」が虚してしまったときは，身体全体の栄養を喪失して生氣が絶えてしまいます。この理由で，起居における屈伸動作が不能で歩行補助具などを利用したり，四肢の筋力が低下したりしている病態に本剤が有用なのです。

⑥朱丹溪によれば，麻痺は氣虚に属するとしています。したがって，麻

痺にも本剤は有効です。また、夜間の尿失禁である「遺尿」も気虚に属するとのことで、これにも有用です。『医方考』にも、諸種の急病で遺尿が止まらない場合は本剤が有用であるとしています。この諸急病とは、いわゆる、「脳卒中」を示しているようです。本項の②のところ、痔出血の止血困難例に本剤が有用である理由を記しましたが、ここにも同様の陰陽論の理論が成立します。脳卒中で「気」が抜け出ている、つまり、「陽」に属する無形の「気」が不足するので、「陰」に属する有形の溺（尿）を固めることができない、ということです。

さて、予は、四君子湯は「脾・胃」、つまり、消化機能を調える薬剤であると考えています。ところが、一般の臨床医はこの意義を理解していないようです。そして、この脾胃を調えることは、それがそのまま、気虚を補うことになるとも考えています。付言すれば、いったん脾胃の機能が回復すれば、五臓の「気」すべてが生じていきます。一方、いったん脾胃の機能低下が生じると全身の陽（=気）が衰えます。後者の原因で、全身が虚弱して気虚となると様々な病態が発生するわけですが、この状態から回復させることは至難となります。

少しばかりの例を挙げて本剤の有用性を説明しましたが、この後は、読者が推察して広めていかれるのがよいかと思えます。

【加減の方法】

付帯状況	追加する生薬など
肝気が虚	当帰・陳皮・生姜
心気が虚	生地黄・当帰・麦門冬
脾気が虚	白芍、甘草を倍にする
肺気が虚	黄耆・五味子・麦門冬
腎気が虚	熟地黄・桂心

血虚	四物湯を合する。八物湯と名づく。
痰があるとき	二陳湯を合する。六君子湯と名づく。
気寒	丁香・木香

証に応じて^{きやく}佐薬や^{しやく}使薬を追加する例は、ここに書きつくすことは不可能と考えますので、これらは略すことと致します。